



着けたくなるマスク

鹿児島大学附属小学校 六年

川上 悠来

「このマスクを捨てたのはだれかしら。」
強い口調の中にあきらめの感情が顔を出す母の低い声。連日のことだが捨てた主は姉だ。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、外出時のマスク着用が当たり前になってきた初めのころ、マスクを手に入れることは簡単ではなかった。どこの店でも売り切れで、私の家族も使い捨てマスクを洗って再利用していた。そんな状況ようであっても姉は帰宅後、一直線にごみ箱へ向かい、捨てていた。

発達障がいのある姉は特別支援学校に通う。決められたルールは必ず守る、臨機応変に対応することが苦手という特性がある。帰宅後マスクを外し捨てる行動は、少し前までは正しいが今は困る。母との約束で、使用したマスクは洗面器に入れることになっていた。しかし、姉にとつて一度身についた習慣を変えようすることは、なかなか難しい。

連日くり返されるそのやり取りを側で見ていた私は、姉が納得する方法がきつとあるはずだと考えていた。そして思いついた。捨てることがおしくなるかわいいい手作りマスクを作ればいいのではないかと。実は臨時休校中に「家族へのおくりもの」というテーマの家庭科の裁ほう課題があった。とつ然点と点がつながり、早速取りかかった。姉のすきなもの、お気に入りのはわかっている、イメージする図案は私の頭の中にすぐにわき上がった。姉の大好きなおぼのペット犬であるアッシュの顔に似せて、ひげ、鼻、口元をししゅうで表現し、丸一日で仕上げた。それ以降、姉はマスクを捨てることはなかった。

その後の臨時休校中、姉は障がい児の学童保育と呼ばれている放課後等デイサービスにその犬のマスクを着けて通った。そこでも使い捨てマ

スクの感しよくをいやがったり、着けたがらない子供達がいるらしく、施設の職員さんが困っている様子を母から聞いた。その時、姉のマスクそう動を思い起こし、ひらめいた。私にその困りごとを解決するお手伝いができるかもしれない。着けたがらないのなら着けたくなるマスクを私が作ってプレゼントしたい、と母に提案した。姉の犬のマスクが好評だったようなので、鼻やひげの色をカラフルな色にアレンジし、犬、ねこの六通り六枚を仕上げ、急いで届けた。すると後日、

「取り合いになるほどの人気でしたよ。」
と最上級のお礼の言葉をいただいた。自しゆく期間中、常にもやがかかっていた私の心の景色は、おそい春が一気に訪れたようで、固い木々のあちこちから勢いよく芽吹き出した。

姉と、姉を支えてくださっている施設の困りごとを、和らげるお手伝いできたことは、さ細な行動だが私にとつて大きな自信となり、社会と関わりをもてた喜びを感じた。社会は一人一人が支え、支えられて成り立っている。今後さらに豊かな想像力を身につけ、人のために行動に移せる人でありたいと心から思う。

【審査評】

最初は、お姉さんのために作ったかわいマスク。それをきっかけに放課後デイサービスのマスクが苦手な子どもたちのために、着けたくなるマスクを手作りした悠来さんの気持ち素敵だと思えます。これまでとは異なる生活様式の中で、不自由を感じることもあるかもしれませんが、悠来さんのような心づかいで、周囲の人の心も温かく明るくなることと思えます。

